木下尚江著作集

第九巻

明治文献

木下尚江著作集第9巻（第三回配本）

昭和四十四年六月二十日第一刷発行©

定価一二〇〇円

著者　木下尚江

発行者　藤原正人

発行所　株式会社　明治文献

東京都豊島区南池袋2丁目8番5号

振替・東京36290番

電話・東京(984)0521

印刷　江明印刷所

製本　昭栄堂

例　言

一、本巻は、小説『労働』を中心に、それ以前に発表され、のちに『労働』の一部となった作品を纏めることを意図した。

(イ)該当する作品は、次の九篇である。

山居雑感（『日刊平民新聞』一号）／盲女（『世界婦人』三号）／味噌こし笊（同五号）／宿無し犬（同六号）／破壊の前夜（『理財新報』一ノ一号）／野の自由（『新生活』四号）／脱営兵（同五号）／嵐の夜（同上）／洗礼（『新天地』二ノ一号）

(ロ)雑誌『新生活』掲載の三篇は、雑誌そのものが、別巻として覆刻される予定であるから割愛し、他の六篇のみ収録した。

(ハ)序文三篇を併せて採録したのは、鉱毒事件・谷中村事件についての、著者自身による説明を求めたためである。

一、『労働』は二刷の写真による覆刻である。

一、新しく活字で組んだ「運動会」以下の九篇には、次のような私意を加えた。

(イ)左記の一篇以外は、発表に至る径路から考えて、著者による校正を経ていないと思われるから、明白な誤字・脱字及び濁点・句読点の脱落等は、補ったが、尚江文の特色を示すものについては、私意を加えていない。

(ロ)「何ぞ速に渡良瀬河畔無告の同胞を救はざる」は、無署名であるから、慎重を期して、(イ)のごとき私意は加えていない。底本としては、編者架蔵の初版本を用いた。

(ハ)「と」は「こと」とし、変体仮名は通行の仮名に改めた。

(ニ)振仮名はとりのぞいた。難訓の場合に限り、改めて、現代仮名遣いで、ほどこした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

序

著作と云ふことは、丁度蛇が皮を脱ぐようなものだ。書き終へた時の自分は、最早書き始めた時の自分では無い。醜き自分を棄てたいと思つて書く。が、一と皮脱いだと思ふと、直ぐ又た新しい厭な皮が目に立つ。斯うして苦痛は時と共に愈々深くなつて行く。

然かし是れは可い。此の苦痛は自分が生きて居る證據であると思ふと、其の奥に希望がある。堪らないのは、其の脱け殼を買つて呉れと、自分で大道を呼んで歩くことだ。世に是れ程鐵面皮な商賣は無い。

一千九百九年五月二十日
三河島の村居に於て

木下尙江

小説

勞働

木下尙江

第一章

（一）

自分の聲に喫驚して眼を醒ます。ビッショリと全身、汗をかいて、動悸が劇しい。あゝ夢だつたかと胸は撫でゝも、暗夜の其處らに今ま見たものゝ影が未だ近く漂ふて居る。――松山庸作は此頃兎角熟睡を得られない。

秋の夕日の椽側に庸作は柱にもたれて又た考えて居る。木の枝には小鳥がしきりに鳴く。垣根の外には隣家の女中が米を洗ふ音がする。坂の下を、豆腐屋が長々

と笛を吹いて行く。樣々な物音に半ば耳は貸しながら、庸作の眼は矢張熟と自分の醜き心の姿を眺めて居るのだ。蒼黑い痩せた頰の、不作法に延びたまばらな髭が、ピク〳〵と引きつるように折々動く。

『勞働。――勞働か。――此の惰けものが能く臆面なく彼樣ことを言つたものだつた』と庸作は目を閉ちたまゝ、顏を顰めた。やがて眼を開いたが、外の光の眩しいので直ぐ又た閉ぢて仕舞つた。

是れまで自分の乘つて居た潮流か、始めて稍々判然と見えて來たような氣がする。

郵便が來た、伊香保へ湯治の妻からだ。

『何だ、手紙か。もう歸つて來るのかと思つて居りや』と口小言しながら、物憂げに封を切つた。伊香保の山の初秋の景色が書いてある。夏の贅澤の客は疾くに皆んな歸つて仕舞つて、今は在鄕の湯治客がチラホラと登つて來て居る。翠の山

が丁度紅葉し始めた。人影稀れな湯元の奥を獨り散歩して、杖の頭で砂利を掘ると、何處からでも湯が湧く。宿の泉水から湯氣が一面に立ち上がつて、鯉や金魚が溫かい湯の中を泳いで居る。閉靜で生命が延びるようだ。一晩泊りになりと氣保養に來ては如何がと云ふ手紙の文面だ。

松山は妙に氣を引き付けられた。『然う。二三日山でも歩いて來ようか――』と考えて居たが、其の翌朝留守をば人に賴んで置いて、着のみ着のまゝでフイと出て行つた。

瀛車の中から雨が降つた。前橋で馬車に乘り換へる時分にも未だ小降りに降つて居て、薄着の身には稍々肌寒く感じたが、馬車の進むと共に雨も止み天も晴れて、野も山も雨後の日影に一ときは美しく光つた。馬車が坂東橋へ差し掛かる頃、見ると眞蒼な利根の河浪が眞紅に耀いて、まるで火焔のように目覺ましい。丁度榛名の峯の後ろに日が沈んで、天一面の夕照である。長い鐵橋の溜り水の紅いに光

る上を、喇叭の音緩く、馬は蹄を揃へて驅けた。

伊香保路二里の暗坂を、庸作は車夫の提灯一つを力に上ぼつて行く。桔梗だの、女郎花だの、種々の草花の、露重もげに頭を傾けた姿が、チラリ〳〵と提灯の火先きに光かる。右にも左にも樣々の虫が聲を競ふて鳴く。庸作は車を下りて稍々暫はし佇んだ。

眞黑な峯の影が暗の中を目近く迫つて來る。一つの峯が去ると他の峯が代つて現はれる。庸作は始て辿る山路の涼しさに、兼ねて耳にして居る名所のことなど車夫に尋ねながら、花と虫との間をウネリ〳〵登る。雨後の空に星の華やかな夜だ。ほんのりと汗ばんで、丁度歩るくに好い。

山の姿が高く額に差迫つた、杉叢の黑い陰に、燈火が一つ障子に映つた。

『着いたのか』と庸作は尋ねた。

『否え。もう一と坂です』と車夫が言ふ。

やがて彼の燈火の前へ來た。小いさな板屋で、燈火の障子に「御休所」と書いてある。軒下には一臺の空腕車がある。中には男の高らかに話す聲がする。女の笑ふ聲もした。

店の横から坂が急に險しくなつた。汗がシト〳〵と出る。二丁ばかりも上ぼつてやがて板橋の上に立つと、兩側には低い古びた家が軒を並べて、湯花の香がヒドく鼻を打つた。

車夫の導くまゝに其の道を眞直に妻の居ると云ふ宿屋の坂を昇ると、大きな建物の二階にも三階にも軒端に洋燈が掛け連ねてある。寂しい暗路に驅れて來た眼には、其れが一ときは華やかに見えた。何處からか琴の音がした。

庸作は帳場の前の庭に立つたまゝ、あたりを眺め廻はした。母家の二階から橋掛りで他の建物へ通ふようになつて居る。橋の下から見える彼方の高い石垣の上に又た三階の客室が聳えて居る。後ろが直ぐに山で、宵闇の低い空に山のうねりが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

一ときは眞黑く見える。軒の燈火は賑かだが、障子に映る客間の燈影は甚だ稀れだ。成程靜からしいと松山は思つた。

小造りな色の白い眼のパチリとした主婦さんが、帳場の椽頭から見上げて呼んだ聲に、直ぐ上の二階の障子の開く音がして、彼の橋掛の欄干の中程に久子の姿が現はれた。『來らつしやいまして！』と、來たのを不思議なように笑いながら階子を下りて來た。琴の音がハタと止んだ。未だ十二三の宿の娘が、久子の室で晝の稽古のお浚いをして居たのであつた。

庸作は兎に角一と風呂浴びて、都會の塵と垢とを洗い流して、濡手拭を片手にブラ〳〵と二階の廊下を戻つて來たが、突き當つて折れようとする時、不圖見ると、直ぐ目の前の山の上へ、今ま丁度陰曆十七八日頃の月が半顏を出した所である。雨あがりの繁げ葉を洩れ來る笑ましげな光を滿顏に浴びた。

庸作は覺えず立ち留まつた。——是れは矢張昨夜見た月だ。否や、昨夜も、一昨

夜も、其の前の夜も、都會の片ほとりの書齋の窓から、眠られぬまゝに、眺めやつた月だ。其れが今ま突然面を合はせると、全るで新奇な始めてのものを見るような珍らしい氣がする。

見て居る中に、月は忽ち梢を離れて其の全身を露はした。空が靑く光澤して、露を帶んだ木の葉が皆な一つ〳〵鱗のように光る。見返へると、世界は眞晝のように明るい。何處の何と云ふ山か知らないが、遠いのも近いのも皆なキラ〳〵と波のように鮮かに描き出された。町の下からは、彼方にも此方にも湯氣が朧ろに白く立ち上がる。

人の燈火が急に汚くなつた。

やがて庸作は月を背にして、遠い山の景色を眺めやる。

先刻湯に行く前に庸作は、伊香保の季節は此の十月一杯でお仕舞になると云ふ話を聽いた。月が代はれば、此の擔の洋燈も取り下ろして仕舞ふ、雨戸は皆んな立

てきつて仕舞ふ。雪が降る、垂氷が下がる、烈しい風が吹く、春、山の雪が解け始めて榛名詣でのお一夜の客が見え、頂までと云ふもの、穴熊のように眠つて冬を送るのだと云ふ話を聽いた　――松山は今ま熟と眼を冥つて、其の冬籠の山里を心に描いて見た。

山は木の葉が落ちて仕舞ふ、家は板戸で封して仕舞ふ、物皆が雪の喪服に包まれて、只だ湯氣のみ哀れに立ち迷ふ。

『あゝ、其の夜半の月！』と庸作は獨語した。

湯あがりの身の冷えるも忘れて庸作は、尙ほ何時までも見て居たが『與へられた我が家』と云ふような感じが、腹の底から切りに湧き上つた。

《二》

翌日は朝の中濛曇りであつた。庸作は辨當を持つて、妻と共に山へ行つた。二ッ

岳だの、相馬などの高根が鮮かに紅葉し始めた。山の上の原は見ゆる限り腰より高く草花が咲き亂れて居る。遠く小鳥の群が雲の中へ消える。彼方にも此方にも虫の聲がする。自然の香に五體伸んびりとして、まるで繩でも解かれたようだ。庸作は折々遠慮なく大聲張り上げて詩など吟じる。が、心の底には絶えず一つ鐵丸のような黑いものが停滯して、體が輕くなればなるだけ、其れが愈々厭な重さを加へる。樣々な舊い姿が又た切りに頭を擡げる。——自分は既に古き職業を棄てた。古き同志を離れた。今は長く自分が乘つて來た潮流、否な、長く自分が漂ふて來た潮流から救い出して、新しき自分の道に行かねばならぬ。考えて見ると、我が戀ふる人の爲め、一度は曾て確かに奇麗に死に得た時もあつた。功名の爲めには寧そ潔く死にたいと希ふた時もあつた。が、其の烈しかつた戀の香も、今見れば、丁度彼の遠山の端の浮雲のように、何時の間にか遠く薄れ去つて仕舞つた。征服の野心！嗚呼、征服の野心！曾ては我が世の光明とも、活動の

生命とも尊み拜んだ功名心が、今は逆まに良心を窒息させる黑雲となり、靈魂を殺す毒刄となつた。此の腹心の奥に深く其の根を張つて居る、我が讐敵の厭な顏が、明々と見える。

『如何だ、一つ山へ引つ込まうか』と突然庸作が振り向いて言つた。

久子は、一度雲間洩れ來る光線を、花持つ左手に遮りながら、右手を延ばして桔梗を一と枝折ろうとする所であつたが、顏を上げて『何です？』と言つた。

『一つ山へでも引つ込まうかと言ふのさ』

『山へ？』と久子は目を見張つた。

『うム』と庸作は首肯いた。

久子は、しばし其の顏を見つめて居たが、今ま折り取つた花を左手に持ち添へながら『其れも可いでせう』

『眞個に可いか』

『はア』

『可し』と庸作は又た向き直つて、わざと路も無い所を高見へ〳〵と花を押し分けて進む。久子も後れて從いて行く。

崖端へ來た。覗いて見ると、エグり取つたような斷崖幾百尺。火山石のボロ〳〵したのが、ザラ〳〵〳〵と絶えず欠けては深い谷底へ零れ行く。ズリ落ちたような離れ山が直ぐ目の下に見える。其處にも花が一面に咲いて居る。フラ〳〵と飛び降りて見たいような景色。

平野一つ隔てゝ赤城の山が寛濶に裾を擴げて向き合つて居る。其の後ろの連山の上に圓く尖つて拔き出て居るのが日光だろう。其れから北へ掛けてグルリと屏風のように立て廻はしたのは、昨夜の月で見た越後境の山々だ。利根川が白布を投げたように赤城の裾をウネ〳〵流れて、日の工合で波がチカ〳〵と銀色に光る。

澁川からの山道が、杉林や花野の間を廻り〳〵て一と筋白い。上ぼり下りの人の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook